

# 町村週報

(町村の購読料は会費)  
(の中に含まれております)

2721号

毎週月曜日発行

発行所 全国町村会 〒100-0014 東京都千代田区永田町1丁目11番35号：電話03-3581-0486 FAX03-3580-5955

発行人 山中昭栄：定価1部40円・年間1,500円(税、送料含む) 振替口座00110-8-47697

<http://www.zck.or.jp>

ワーキングホリデーの運営など、高い評価のまちづくりを展開する宮崎県西米良村を訪れた。県中西部に位置し、熊本県球磨地方に隣接する山間部だ。丁度、エドヒガン桜が咲く山肌。ポツポツと咲き始め、濃いピンクのイワツツジが真つ盛りの季節だった。西米良村は明治22年の市制町村制施行以来、市町村合併はせず、単独で村を守ってきた。

平成9年、全国に先駆けてワーキングホリデー制度を取り入れ、交流人口の拡大につとめ、ターナー賞も増えている。中核施設の西米良温泉もユニークだ。3セク「米良の庄」が経営し、村内の高齢者や若者が自主的に風呂掃除に参加する。当日は、バリアフリーの改装完成記念で、村民に無料で開放され、賑わっていた。村のおばあちゃんたちが、生涯現役の意気込みで、食事や特産品を販売する川の駅「百菜(さい)屋」も活き活きとしている。

新しい取組みが村内の小川地区で始まった「平成の桃源郷・おがわ作小屋村」だ。狭い山道(しかし国道 黒木定蔵村長いわく「酷道」)を、役場から約10キロ進むと、忽然と開け、集落が現れる。ここが小川地区で、室町から江戸時代にかけて領主菊池氏が拠点とした一帯である。菊池公は太政奉還時、所有していた領地を均等に領民に分け与えた。自分の土地を持つことに

## 閑話休題

### 宮崎の山中に息づく「菊池精神」

法政大学教授 岡崎 昌之

なった領民は、開墾に励み、自宅から離れた場所には、農作業小屋として作小屋を作った。やがてはこれが隠居屋となるなど、独特の生活形態が築かれた。これを現代に再現したのが「おがわ作小屋村」で、農家レストランや特産品の売店も兼ねている。

400年に渡った菊池氏の統治時代、この山中にありながら、村民子弟全てを藩校、弘文館に通わせ「貧しさに耐えながらも文武を怠らず、礼節を重んじ、国家社会に尽くす」の教えを残した。現在もその「菊池精神」は村内に息づいている。

平成17年には台風14号で甚大な被害を受け、外部との交通も長期間途絶した。こうした困難に直面したとき、また新しいことに取り組むとき、常に立ち返るのは現在でもこの「菊池精神」だ。将来を構想するとき、地域の過去に立ち返ることが、まちづくりの基本だということを教えてくれる。

津野山神楽の舞  
(高知県梼原町)

# 新たな過疎対策（ソフト対策）の推進で報告書 ―10分野ごとに過疎ソフト対策の事業例を提示―

総務省の「新たな過疎対策（ソフト対策）」の推進に向けての研究会」（委員長・宮口侗迪早稲田大教授）はこのほど、改正過疎法によりソフト対策事業も過疎対策事業債の対象となったことを受けて、「産業振興と観光開発」など10分野ごとに、今後重点的に取り組むべきソフト施策の方向性とその具体的な事業例を盛り込んだ報告書をまとめた。その中では過疎債を活用するソフト対策は、その成果・効果が将来にわたって持続・拡大するなどの取組みであることが望ましいと指摘。主な事業例には「デマンドバス・乗り合いタクシー等の運行に対する支援」や、「地域おこし協力隊等の受入れ」「定住コーディネーターの配置」などを挙げた。報告書は「なお書き」で、事業例等は過疎債の対象となるかを元に整理したものではないことに留意を求めているが、過疎関係市町村が地域の実情に合った必要なソフト対策事業を検討する上で参考となりそうだ。

◇過疎債活用のソフト事業は成果・効果が将来にわたり  
持続・拡大する取組みで

報告書は、過疎地域自立促進市町村計画等が改正過疎法により策定義務付けが廃止され、「できる」規定

定する必要があることを説明。その上で、今後、各過疎地域市町村が地域の実情に応じた実効性ある自立促進市町村計画を策定する上で重要な視点や、重点的に取り組むべきソフト対策の分野別方向性等を提示した。

うち、「自立促進市町村計画の策定に当たり重要となる視点」では、過疎対策は、地域それぞれの実情や特性等について、地区単位や集落単位などでの確に把握すると同時に、それらの情報を統合して地域ごとの課題や地域間格差を的確に抽出していくことが、全ての対策の出発点だと指摘。特にソフト対策事業については、地域の実情を十分把握し、様々な課題がある中でも住民が安全に安心して暮らすことのできる地域社会の実現を図る上で特に重点的に対策を図るべき課題や施策を見極め、真

に必要な対策について重点的に記述するなどにより、計画の「実質化」を図ることが求められると強調した。

さらに、各事業分野においてどのようなソフト対策が重要かつ必要であるかを見極め、事業の優先順位を定めることが重要だと指摘するとともに、ソフト対策事業の検討に当たっては、これまで整備されてきたハードの利活用にも配慮することが望ましいとした。また、ソフト対策事業の中には、その事業成果が有形の資産・資源としては明確に残らないものもあるが、過疎債を活用するソフト対策は、その成果・効果が将来にわたって持続・拡大し、過疎地域の課題解決に寄与するとともに、過疎地域の自立促進に向けて様々な仕組みを革新していくような取組みであることが望ましいとした。

このほか、①改正過疎法は201

## 政 策

5年度までの6年間で期限とするもの。計画策定後も、これまで以上に事業の進捗管理にきめ細かく目を配り、適宜計画内容を見直すことにより、計画の実効性を高めることが求められる②ソフト対策事業は、運営主体や運営の仕組み、サービス等の対象地域(対象者)の状況変化などに応じてその成果・効果が大きく変動しやすいため、不断の進捗管理と成果・効果の分析・評価を通じて計画内容を精査し、必要な見直しと変更を行うことで、地域にふさわしい事業の「動かし方」を探っていくことが求められる一などとした。

一方、「重点的に取り組むべきソフト対策の分野別方向性とその具体的な事業例」をみると、「産業の振興及び観光の開発」では、今後は第1次・第2次産業と観光・レクリエーション等との有機的結合による6次産業化などに重点的に取り組むことが有効だと指摘。事業例として▽起業・創業や新産業の創出に対する支援Ⅱ(例) 過疎地域における新事業の創出を促すため、新規事業の立上げや初期期の事業活動を支援する▽6次産業化の推進Ⅱ(例) 既存の農地と民家や既存施設等を活用した6次産業化を推進するため、農林水産

業者や地域住民等による活動組織の立上げや施設の維持管理、運営等について支援する▽情報通信基盤を活用したテレワークの推進Ⅱ(例) 情報通信基盤を利用したテレワーク事業を推進するため、遊休施設等を活用する一を提示した。

このほか分野ごとの事業例は次の通り。

## 【交通通信体系の整備】

▽デマンドバス・コミュニティバス・乗り合いタクシー等の運行に対する支援Ⅱ(例) 交通空白地域における生活交通手段の確保を図るため、市町村が民間業者に委託してデマンドバスを運行したり、運行事業者への支援等により低廉な価格でコミュニティバスや乗り合いタクシーを運行する▽バス路線の維持対策Ⅱ(例) 地方バス路線の維持を図るため、市町村が独自に運行事業者に対して支援を行う▽交通弱者対策(高齢者等の生活交通の確保)Ⅱ(例) 高齢者や障害者などの交通弱者に対しタクシー等の利用への支援を行う▽地域自治組織等による輸送活動に対する支援Ⅱ(例) 交通空白・不便地域において、自治会や集落等の地域自治組織などによる相互扶助活動としての輸送活動の実施を支援する

## 【情報通信基盤の整備・利活用】

▽情報端末の活用による買い物等生活支援対策Ⅱ(例) 中心集落や商店等から遠隔にある集落の高齢者等が自宅で情報端末から日用品等の購入ができるようにするなど、これまでの過疎対策の一環として整備されてきた情報通信基盤を活用した集落での生活支援に取り組む▽高齢者等緊急通報システムの整備Ⅱ(例) 高齢者の著しい集落等において高齢者等が安心して生活を送ることができるよう、GPS機能付き携帯電話の高齢者への貸与や警備会社等との委託等により市町村が緊急時の通報システムを整備・運営する

## 【生活環境の整備】

▽上水道施設・生活排水施設の整備への支援Ⅱ(例) 地域の実情に即した上水道施設・生活排水施設の整備として、地域住民による飲料水供給施設の建設や浄化槽の整備等を支援する▽地域住民等による景観保全活動への支援Ⅱ(例) 過疎地域における良好な集落景観の保全を図るため、地域住民等が主体となつて行う景観保全活動(荒廃農地の復元、道普請、街並み景観の再生など)に対し、必要な活動費を市町村が支援する▽U・J・ターン促進のための空き

家の利活用Ⅱ(例) U・J・ターンの促進と地域景観の保全を図るため、市町村が空き家を借上げ改修し、移住者用住宅として整備する

## 【高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進】

▽居宅介護サービスの充実Ⅱ(例) 市町村内で周辺部など介護サービスに不均衡が生じている地域におけるサービス提供体制の充実を図るため、介護サービス提供事業者に対する支援を行う(例えば、中心部から遠隔にある集落に対して介護サービスを提供する事業者に対し交通費等の助成を行うなど)▽情報通信基盤を活用した高齢者の見守り体制の充実Ⅱ(例) 高齢者のみ世帯や高齢者単独世帯が在宅で安全にかつ安心して生活を送ることができるよう、情報通信基盤を活用した安全確認のための見守りシステムを開発・運用する▽高齢者等に対する配食サービスⅡ(例) 高齢者の安全・安心な生活を支え、見守る体制の充実を図るため、一人暮らし高齢者への配食サービスを行う▽高齢者福祉対策に係る専門的人材の確保(都道府県による人的支援)Ⅱ(例) 過疎地域市町村における保健・福祉サービスの充実のため、都道府県が持つ高度な技術



## 政 策

や専門的人材等の資源ストックを活かし、保健福祉分野の専門的人材の確保・育成を図る

## 【医療の確保】

▽医師修学資金貸付事業への支援Ⅱ

(例) 地域医療の従事者を確保するため、将来過疎地域の病院・診療所において医療に従事しようとする者

に対して市町村が修学資金の貸し付けを行う▽専門医の派遣に対する支援Ⅱ(例) 市町村内の医療機関にな

い専門診療科の受診を可能にするため、市町村が専門医や医療機関に委託し定期的に専門診療科の出張診療を行う▽当番医制の維持に対する支

援Ⅱ(例) 無医地区における医療の確保や、休日・夜間等の救急医療体制の確保等を図るため、市町村が地

元医師会や医療機関等に委託し、当番制で医師を確保又は派遣する▽通

院に係る交通手段の確保に対する支援Ⅱ(例) 無医地区等の住民に対す

る医療の確保対策として、市町村が患者輸送のためのバス等を運行した

り、あるいは医療機関が運行する通院シャトルバスの経路延長分につい

て市町村が支援するなど、通院に係る交通手段の確保を図る

## 【教育の振興及び地域文化の振興等】

▽遠距離通学に対する支援Ⅱ(例)

学校統廃合や路線バスの廃止等により通学費負担が増す世帯への支援を行う▽廃校舎の有効活用Ⅱ(例) 地

域コミュニティの中核的施設である廃校舎を活用し、企業誘致や新産業の創出を図る(企業が廃校舎を活用

して新規事業に取り組みにあたり地元住民の雇用を促進するなど)

## 【集落の整備及び集落機能の充実】

▽自治会活動への支援Ⅱ(例) 集落

活動の活性化や地域コミュニティの再生を図るため、自治会や集落等が行う地域づくり活動に対し交付金・補助金等を交付する▽見守り体制の構築(集落支援員の活動等)Ⅱ(例)

市町村が地域にきめ細かく目配りをするための一手段として、「集落支援員」等を配置し、集落の定期的な巡回や生活状況、農地・林地の状況

等の把握、集落住民による集落点検や話し合い等の実施をサポートするとともに、その結果を踏まえた集落

活性化策の実施へとつながる▽集落点検など集落の実態把握Ⅱ(例) 市

町村が集落の実態をきめ細かく把握し、集落対策に積極的に取り組むことを目的として、高等教育機関や調査機関、地域住民組織等との連携に

より集落点検や実態調査、社会実験等を行う

## 【人材育成・人材確保、地域の担い手の確保】

▽地域の担い手の確保対策Ⅱ(例)

募集・PR費、転入者の住宅確保への支援等により、人口減少の著しい

集落等に移住・定住し地域活動等に携わる人材を確保する▽地域リー

ダーの育成と活動支援Ⅱ(例) 住民の自治力を高め、住民自身が地域の将来像について検討し、地域課題の

解決に取り組むことができるよう、市町村が主体となつて地域リーダーの育成や住民による自治組織の活動

支援等に取り組む(関連する経費…リーダー研修の開催費、地域リーダー等住民による地域自治活動への補助、専門家やアドバイザー等の派遣に係る費用等)▽地域の担い手の

一員としてのNPO・民間事業者等の活動への支援Ⅱ(例) 都市と過疎地域を結ぶコーディネート役割を担うNPO団体や、買ひ物の代行

(届けるサービス)、過疎地有償運送サービスの提供など、過疎地域での生活を様々な側面でサポートするN

PO団体の活動を支援する

【都市住民との連携・交流の促進や交流居住・定住の促進】

▽地域おこし協力隊等の受入れなど

Ⅱ(例) 人口減少・高齢化が進み

地域活動の維持が困難になった集落等を支援するため、市町村が「地域おこし協力隊」等の事業を活用した

都市住民の受入れに取り組む(関連する経費…隊員の募集・PR費、隊員に対する活動委託費等)▽定住

コーディネート者の配置Ⅱ(例) 都市部等からの移住・交流や定住の促進を図るため、都市部と過疎地域の

仲介者として、都市部等への情報発信や定住希望者への相談対応、空き家等の発掘・斡旋や地域住民との仲

介などを行う「定住コーディネート」(仮称)を配置する(関連する経費…募集・PR費やコーデ

ィネーターに対する活動委託費、研修費等)▽定住促進対策Ⅱ(例) 人口

減少・高齢化が深刻な過疎地域にあって、特に若年層の流出を食い止

め、定住を促進するための取組みとして、市町村が若年世帯等に対して

住宅の確保や通勤等を支援する

## ◎ 町村週報のご購読 ◎

「町村週報」の購読を希望される方は、はがき、FAXまたはEメール(kouhou@zckor.jp)にて、全国町村会広報部までお申し込み下さい。

★年間購読料1,500円(送料込み)

★請求書を送付いたしますので、折り返しお振り込み下さい。

## 活 動

## 「ダム・発電市町村活性化実現大会、定例総会」を開催

△渡部恒三衆議院議員の挨拶



ダム・発電関係市町村全国協議会（会長・辻 一幸山梨県早川町長）は5月19日、全国町村会館にて「ダム・発電市町村活性化実現大会、定例総会」を開催し、水力交付金の拡充・恒久化及び水源地域振興対策の推進に関する決議等を行った。

総会は、社会長の開会挨拶の後、来賓の渡部恒三衆議院議員、松下忠洋経済産業副大臣、広野ただし民主党副幹事長からそれぞれ挨拶が行われた。

その後、議事に入り、①「電源立地地域対策交付金（水力交付金）の拡充・恒久化に関する決議」②「水源地域振

興対策の推進に関する決議」を採択するとともに、「ダム・発電関係市町村振興対策の充実・強化に関する意見」を取りまとめ、地方自治法第99条に基づく「意見書」と併せて、総会終了後、民主党、関係省庁及び地元選出の国会議員等に対し要請運動を行った。

### 電源立地地域対策交付金（水力交付金）の拡充・恒久化に関する決議

豊富な水資源に恵まれた我が国において、水力発電は、これまで電力の安定供給に大きく寄与してきましたが、これは山間部等条件が不利な地域に立地する全国の約500市町村が、発電施設建設という国策に協力してきたことによって実現されたことを、国及び都市住民は十分認識すべきであります。

電源立地地域対策交付金（水力交付金）は、水力発電施設が立地する我々市町村の住民福祉の向上と電源立地の円滑化に資することを目的に創設され、これまで30年間にわたり住民生活の向上等に重要な役割を果たしてきました。

そして、国が掲げた温室効果ガス25%削減を達成するためには、国内の再生可能エネルギーの78%を占める水力発電とそれを支える水力交付金は、

今後益々重要性を高めていくものと確信しております。

よって我々は、国に対し、電源立地地域が将来に向けて振興・発展されるよう、下記事項の実現を強く求めるものであります。また、多数の地方議会も同趣旨の意見書を国に提出していることを申し添えます。

## 記

一、水力交付金は、平成22年度末をもって多くの関係市町村で交付期限を



△吉田おさむ衆議院議員（中央）に要請

迎えるが、過去30年間にわたる交付実績や、今後とも安定的な水力発電を維持する必要があることを考慮し、平成23年度以降は恒久的な制度とする。

一、二酸化炭素を排出しない純国産の再生可能エネルギーとしての水力発電の役割を十分考慮し、水力交付金の最高限度額及び最低保証額の引き上げなど交付条件の改善並びに使途の拡大や事務手続きの簡素化を図ること。

以上決議する。

### 水源地域振興対策の推進に関する決議

ダムを核とする水源地域は、国民生活に欠かすことができない「水」の供給をはじめ、豊かな森林の保全、水資源のかん養及び自然環境の保全等、多面的かつ公益的な役割を担っています。

しかしながら、中山間等の条件不利地域に位置することに加え、多くの犠牲を伴ったダム建設の後も過疎化・少子高齢化の進行等により住民生活に関する基礎的条件が著しく疲弊するなど、水源地域は深刻な問題を抱えています。

ダムが所在する我々市町村は、水源地域が果たしている公益的な役割の維持に今後とも努めて参りますが、そのためには、国民の理解と支援のもと、そこに人が住み続けることができる生活環境や産業基盤を整備することが不



## 活 動

可欠となっております。  
 よって、国は、ダムが所在する水源地域の市町村が果たしている国家的な役割と厳しい現状に置かれていることを適切に評価し、その振興・発展のた

め、下記事項を実現すること。

## 記

一、今後とも下流域への安定的な流水を確保するため、「ダム所在水源地域振興法（仮称）」を制定し、水源林や

河川環境の保全、定住促進に向けた生活環境の整備、地域資源を活用した地域産業の育成等に取り組むこと。  
 一、都道府県が徴収している流水占用料等については、水資源のかん養、河

川環境の改善等に果たしている地元市町村の役割にかんがみ、その全額を市町村の収入とするよう河川法を改正すること。

以上、決議する。

## 「全国森林環境税創設促進」総決起大会を開催



総決起大会は、はじめに主催者を代表して辻促進連盟会長から挨拶が行われた後、来賓の山谷えりこ参議院環境委員会委員長、加藤修一公明党環境部会長、篠原 孝衆議院議員からそれぞれ挨拶が行われた。

その後、議事に入り、板垣促進議員連盟会長を議長に選出した後、①平成23年度税制改正に向けた活動方針②全国森林環境税の創設に関する意見③合同要請活動実施要領について決議し、大会終了後、民主党、関係省庁及び地元選出の国会議員等に対し要請運動を行った。

### 全国森林環境税の創設に関する意見

近年、森林のもつ、地球温暖化の防止や国土の保全、水資源の涵養、土砂災害防止、生物多様性保全、自然環境の保持など「森林の公益的機能」に対する国民の関心、期待は大きなものとなっている。

また、低炭素社会の実現が世界的なテーマとなる中、京都議定書の目標達

成に加え、2020年度25%削減の目標達成に向け、森林吸収源対策の加速化が不可欠となっている。

しかしながら、木材価格の暴落・低迷や林業従事者の高齢化、後継者不足など、林業を取り巻く環境は、依然と



▷興石民主党幹事長職務代行（中央）と一川民主党副幹事長（右から三人目）に要請。

して厳しい情勢にあり、山村では過疎化・少子高齢化が進行している。

こうした中、山村地域の市町村は、森林の整備・保全や担い手の確保・定住対策、森林循環資源の有効利用促進等、森林・林業及びこれらを支える山村の活性化に懸命に取り組んでいるが、危機的な市町村財政の状況から、恒久的・安定的な財源は大幅に不足している。

よって、森林の整備・保全等を担う市町村の財源の強化は目下の急務であり、下記の制度創設を実現するよう強く要請する。

## 記

1. 森林の公益的機能の持続的な発揮、そのための森林・林業・山村対策の抜本的な強化をはかるため、二酸化炭素排出源を課税対象とする新たな税財源として「全国森林環境税」を創設し、国民的支援の仕組みを構築すること。  
 2. 地球温暖化対策のための税の導入にあたっては、二酸化炭素吸収源として最も重要な機能を有する森林の整備・保全等を推進するための市町村に對する新たな税財源制度を創設すること。

## フォーラム

地域資源を活かした活性化策

現地レポート

# 進取の気性をいまに受け継ぐ地域おこし ～龍馬脱藩の道を訪ねて～



ゆす はら ちょう  
高知県 梼原町

志士の功績が残るこの地に八志士の群像を建て「維新の門」と名付けた。  
近代日本の黎明は、この梼原の地より輝いた。

文久2年（1862年）3月24日、維新を夢見て土佐藩からの脱藩を決意した坂本龍馬は、同土沢村惣之丞とともに高知城下を出奔し、翌25日、梼原に到着。梼原の勤王の志士である那須俊平、信吾父子の案内により、葦ヶ峠を越え、26日、伊予の国（愛媛県）に脱藩を果たした。

時は流れて平成の世、龍馬が通った道・梼原街道は、「維新の道」と名付けられ往事の面影をたどることが出来る。大河ドラマの影響で訪れる人も急増、様々な分野で進められてきた地域活性化の試みは着実に実を結びつつある。地域をいきいきと輝かせるために活動している人たちへの取材をもとに梼原町の「いま」を紹介したい。





## フォーラム

## 龍馬ブームが追い風に

いま榑原町が注目を浴びている。人口4千人の山あいの町に、今年に入ってから33,000人を超える観光客が訪れた。NHK大河ドラマ「龍馬伝」の放送開始にあわせ県内では「土佐・龍馬であい博」が開催されており、4つのパビリオンのひとつが「ゆすはら・維新の道社中」である。メイン会場となる町立歴史民俗資料館は、「駆けける！」をテーマに龍馬脱藩前夜の様子や榑原の志士の生き様が臨場感あふれる空間に再現されている。

町内には、脱藩の道が町中心部や山道にあり、以前から地元のボランティアガイドによる案内が行われていた。地元ガイドで結成する「ゆすはらでいの会」のリーダーが榑原龍馬会会長の下元秀俊さんだ。龍馬会の発足は6年前、当時、公募で集まった町民による「榑原の明日を考える会」が、龍馬が脱藩するときに通った最後の町という特性を地域おこしに活かせないかと考えたことがきっかけとなった。当初5人で始めたガイドは、現在、女性も含め27名。紋服に刀を差した出で立ちで、約1時間半をかけ町内を案内する。1年目に案内した観光客は年間600人、2年目には800人に増え、4年目となる今年はずか5ヶ月で2,300人を超える勢い。だが下元さんがめざす目標は10万人と大きい。「訪れた人に、もう一度榑原にきたいと思ってほしい」、リピーター率を高めることが課題であると下元さんは語る。

住民の間でも「維新の道」が町外に発信する重要な地域資源になるという認識が高まりつつある。「榑原には津野山神楽などの文化的資源も多く、これら歴史・文化を相乗効果で地域経済の活性化を図りたい」と下元さんの思いは熱い。8月には東京のアンテナショップで特産品を売り出すことも決まっており、現在、目玉となる商品をメンバーが一丸となって開発中であるという。

## 「グリーン・ツーリズム ゆすはら」を体験

交流人口の拡大で地域の活力を取り戻そうとする動きが広がっている。グリーンツーリズムの展開は、田舎志向の都市住民のニーズにマッチし、有効な手法と認識されており、なかでも農家民宿や各種体験民宿は農山村ならではの食事や農作業、伝統工芸の体験などを味わうことができ、魅力的だ。榑原町でもグリーン・ツーリズムへの取り組みの一環として、いくつかのプログラムを用意し、力を入れている。今回は2箇所の現場を訪ねる機会を得た。

## ①農家民宿「いちよの樹」

「いちよの樹」は県内で最も早く開業(2000年4月)した農家民宿。実際に宿泊し、田舎体験の魅力の一端に触れることができた。

経営するのは、上田知子さん。農林水産省の「農林漁家民宿おかあさん100選」に選ばれたこともある。経営のモットーは「田舎のない人のいなか」になりたい。「榑原は人情豊かで、水や空気がおいしい。この素晴らしい自然の恵みを活かし、たくさんの人と出会えることを楽しみにして開業しました」と当時の思いを話してくれた。現在、町内には4カ所7軒の農家民宿が営業している。農山村で過ごすことがブームとはいえ、お客さんの取り合いで競争になるのでは、と不安になるが、「それぞれが個性的で一芸を

季節折々の草花が目を楽しませってくれる。



▷歴ドル・美甘子さんを囲んで記念撮影。右下が榑原龍馬会会長の下元さん。



▷上田さんの温かいもてなしに魅かれて訪れるリピーターも多い。いろいろと山菜料理の前で。



## フォーラム

持っている」と上田さん。宿泊者をもてなす山菜料理も同じ物はないという。

「いちよつの樹」の年間利用者は約800人、そのうち約2000人がリピーターである。昼は自然の中での農業体験、夜はいろりを囲んでの語らいと、家族ぐるみの温かいもてなしに感動し、もう一度訪ねてみたくなる気持ちを実感した。

## ②和紙づくり体験民宿「かみこや」

次に訪問したのは、まさに「個性的な和紙づくり体験民宿「かみこや」」。ここは標高が高く、水もきれいで和紙の原料である三桧栽培に適しており、土佐和紙の伝統技術が根付いている。現在、三桧の栽培は途絶えてしまったが、手漉きの和紙づくりに適した風土であるため、はるかオランダからこの地に移り住み、工房を構えながら和紙づくりの体験民宿を営んでいるのが、手漉き和紙工芸家ロギール・アウテンボー



▽「かみこや」のロギールさん・千賀子さん夫妻。

ガルトさんと妻の千賀子さんだ。ロギールさんは母国オランダで出版関係の仕事をしてきたが、和紙の魅力にとりつかれ1980年に来日、各地を転々とした後、1992年に榛原町に移り住んだ。当初は和紙だけを作っていたが、その後、和紙を使った灯りのオブジェなども制作、現在はこれらの製品のインターネット販売も手がけている。

夫妻が「かみこや」を始めたのは、2006年のこと。以前から観光客相手に周囲の草花を漉きこんだ和紙づくりの体験工房を開いていたが、ゆったりした時間の中で和紙文化に触れてもらいたいという気持ちで、宿泊施設を併設した。宿泊客は若者中心だが、海外から日本文化を体験するために訪れるケースも増えているという。この伝統文化継承のユニークな取り組みが評価され、昨年、毎日新聞の「グリーンツーリズム大賞2009」優秀賞を受賞した。

ロギールさんの目下最大の悩みは和紙の原料不足と後継者の問題。特に原料栽培は危機的状況にあり、あと10年のうちに国が何らかの手段を講じなければ、国産和紙は途絶えてしまうという。一方、後継者育成の試みとして、地域の小学生に自分たちの卒業証書を原料から作ることを、十数年前から教え続けている。

「田舎に若い人の目が向かないと

日本の将来がない」と夫妻は強調する。山からのいきいきとした発進力で若い人たちを惹きつけたいという思いから、大学生やインターンシップを受け入れるための宿泊施設を増やす準備を進めている。「美しさも質も世界」と信じる日本の和紙文化を後世に伝えるべく、ロギールさんの取り組みが続いている。

日本ではじめての  
棚田オーナー制度

細い坂道を登り切り視界が開けると一面の棚田が広がる。この棚田は神在居地区の千枚田と呼ばれている。山の斜面のわずかな土壌を利用し、谷底から水を引き、石を積み石垣を築き上げられた。かつて榛原を訪れた司馬遼太郎は、『街道をゆく 因幡・伯耆のみち、



▽農作業を通じて交流が生まれる。

▽千枚田を前にふると会長長の田村さん。



榛原街道(朝日新聞社刊)のなかで「千年来、榛原の山々にきざみつけてきた先人の営みは、この田が証している」と記している。

神在居地区でも農家の高齢化や後継者不足から休耕田が目立つようになり、昔のような情景が見られなくなってきた。その対策として地域の有志が町の協力のもと「千枚田ふるさと会」を結成。1992年、全国に先駆け「千枚田オーナー制度」を開始した。オーナーは1区画(約100㎡)につき年間四万十(しまんと)円を払い、地元農家に指導を受けながら農作業に汗を流す。喪われつつあった千枚田は、農家と都市住民の交流の場に変わった。

制度のスタート時からオーナーを続け、2001年に家族で町に移住した田村俊夫さんからオーナー制度の現状と課題を聞いた。今年から「千枚田ふるさと会」の会長を務める田村さんだが、

## フォーラム

△「鷹取の家」の前で矢野さん(左)と氏原さん(右)。



△味も本格的、石焼ビビンバ定食。

本業は広告関係で、自身が経営する松山市の事務所に片道1時間半かけて通勤する。「スタート時は15組だったが、最盛期は30組くらいのオーナーがいた。それが徐々に減ってきて今年10組くらい」と田村さん。その理由のひとつが、1995年に梶原町で開かれた「第1回全国棚田サミット」でオーナー制度が注目を浴び、全国的に広がった結果、遠方からの応募者が減ったことだという。

しかし農家のほとんどがお年寄りで、受け入れ側として限界にきているといった深刻な理由も忘れてはならない。「オーナー制度には若い人も来ていて、リピーターになっているのでそこに期待したい」としながらも「彼らには本当は定住して欲しいが、生活するすべがないのでそれも難しい」と将来に不安を感じている田村さんだが、リピーターが多いということは、それだけ地域に魅力があることの証でもある。「田んぼはこの

ままだと確実に耕作放棄地となる。オーナー制度は千枚田という日本の文化遺産を守ってきた側面があるので、国としてもこの景観保護を支援する施策を講じて欲しい」と田村さんは訴える。

### 交流から生まれた特産品

次の取材先は、ある交流から生まれた特産品を製造している初瀬地区。その特産品とはキムチである。「何故、梶原でキムチを作るの?」という疑問がわくが、韓国の大学生との文化交流をきっかけに地元の女性らが開発した新名物だという。製造しているのは、地域の住民(女性8名・男性2名)でつくる「鷹取キムチの里づくり実行委員会」。同地区には1997年から毎年、韓国の大学生がフィールドワークに訪れており、彼らに宿泊先を提供したことで、住民との交流が始まり、親睦を深めてきた。こうした縁に加え、町が2002年

度に始めた地域活力支援事業で廃校(旧初瀬東小学校)を交流施設「鷹取の家」として整備し、過疎の進む集落の活性化策として浮上したのがキムチづくりだった。県内在住の韓国人を講師に招き、本場仕込みの技と味を研究、鷹取山にちなんで「鷹取キムチ」を商品化した。各種物販イベントや町内の量販店などを皮切りに、一昨年には県内の大手スーパーにも並ぶようになった。商工会による通信販売や、インターネットのグルメサイトでも取り扱われており、韓国産唐辛子を使うキムチは、韓国の学生も「まさに韓国の味」と太鼓判を押す。一方、白菜など野菜類は地元産を使用。町のシルバー人材センターに白菜の生産を委託するなど、取り組みは波及効果も生んでいる。出荷量は初年度1、500キロが3年後には4、500キロに増加。2008年7月には、「鷹取の家」を韓国レストランに改修、オープンした。レストランは金土日のための営業だが、マスコミ報道の影響もあり、町内だけでなく高知市や愛媛県など遠方から、この1年半で2千人を超えるお客さんが来店し、大好評を得ている。

順調に進んでいるように見える「鷹取キムチ」だが、やはりここでも課題となっているのは後継者の問題だ。実行委員会の矢野多香子さんからお話を伺ったところ、こ

の地区は高齢者が多く、若い人が少ない。うちも嫁はいるが働きに出ているので後を継ぐ人がいない」と嘆く。しかし現役でキムチづくりをしている女性には、矢野さんはじめ皆さん元気で若々しい。キムチづくりを始めて変わったことを伺うと、「みんなとの交流が生きがいにつながり元気の秘訣になっている。お客さんから『おいしかったよ』と言ってもらえることが一番嬉しい」とのこと。キムチドレッシングと最近売り始めた焼き肉のたれも好評で、販路の拡大も図っている。「将来的には、地域に新たな雇用場が生まれれば」と期待を寄せる。

### 癒やしで地域を元気に

ここ数年、森林が持つ癒やし効果の研究が進んできた。その効果を科学的に検証し、心と身体の健康に活かそうという試みが森林セラピーである。



▷3kmにわたって癒やしの空間が広がる。



## フォーラム

梶原町の森林セラピー基地、森林セラピーロードは、2007年3月に森林セラピーサエティから正式に認定を受けている。今回取材したのは、松原地区の「久保谷川セラピーロード」、88万㎡を占める国有林には、モミ、ツガを主とした樹齢数百年の立木や切株が群生し、独特の景観をつくっている。セラピーロードを案内してくれたのは、松原区長の下元幸さん、郵便局長退職後、地域おこしの相談役としての役割を担っている。「久保谷川セラピーロード」は延長3kmの小道、もとは100年前から田畑を潤してきた水路であった。これを地域住民が主体となり、「寂れていくふるさとを残すために、たくさんの人に来て欲しい」という期待を込め、2006～2007年度にかけて県の森林環境税事業「生き生きこうちの森づくり推進事業」を活用し、ウォーキングロード周辺の間伐や休憩所などの整備に取り組んだ。同じく2006、07年度に実施した3回のモニターツアーも成功。「外から訪れる人たちの交流で、

松原区長の下元さん。



はうまうまいたり、いかなかったり。試行錯誤の連続です」と下村さん。加えて「梶原は以前から住民活動が盛んでした。それを後押しするのが行政の役割」と強調する。梶原町で住民による地域おこしが盛んな理由として、独自の住民組織単位である「区」による活動が根付いている点あげられる。「区」とは明治の合併以来引き継がれてきた旧村単位の6つの自治区（越知面、四万川、梶原東、梶原西、

住民が地域資源に自身を持ち元気がなった」という。

この森林セラピー事業が起爆剤となり、地域おこしに向けた議論も活発化した。「活動メンバーの輪を広げたい」「リピーターを増やしたい」「これを引きつかけに農家民宿や喫茶店の開業を目指したい」といった前向きな意見が交わされるようになったと下元さんは顔をほころばせた。

### 「粋」と「絆」を大切にする町

今回の取材では町環境推進課・地域振興係の川上寿久さんと下村千佳さんに様々な手配と案内をいただいた。取材先で見た取り組みについて、「どれも町の明るい展望が開かれる可能性がありますね」と話を振ると「地域おこしはうまうまいたり、いかなかったり。試行錯誤の連続です」と下村さん。加えて「梶原は以前から住民活動が盛んでした。それを後押しするのが行政の役割」と強調する。

＜維新の道沿いにたたずむ茶堂。＞



初瀬、松原）。それぞれに区長があり、独自の活動を実践している。町も「区」による住民自治機能の維持・強化が地域の活性化につながるものと考え、その組織力向上を支援する役割を果たしている。例えば、地域づくりのキーマンたちを行政が、点から線、線から面へとネットワークを形成していく様はその好例だろう。これらの相乗効果が他とは異なるユニークな施策を生み出しており、愛媛県との県境という不便な立地条件をプラスに変える発想の転換は「梶原方式」とも呼ばれている。

もうひとつ忘れてはならないのが、梶原の町民気質である。ここには古くから訪れた人をもてなす茶堂文化が息づいている。かつて旅人をお茶やお菓子でもてなした茅葺き屋根の茶堂がいまなお点在する。「遠くより訪ねてくる者は厚遇すべし」というおもてなしの心がいまも脈々と受け継がれている」と吉田尚人副町長。その「おもてなしの心」が訪れる人に安らぎや心地よさを与え、リピーター率の向上につ

ながっているのではないだろうか。

昨年12月から町政を預かる矢野富夫町長は、「これからのまちづくりは、住民一人ひとりが輝かなくてはならない。みんなが楽しくやるために、行政が何をできるか」を問い続けているという。今回の取材では、住民活動と行政支援のバランスの妙味が、先進的な地域づくりの随所に感じられた。矢野町長が梶原を評して「粋」と「絆」を大切にする町」という由縁だろう。

「大河ドラマ『龍馬伝』の放映が終了する来年1月から勝負」。町長はじめ、随所で語られた言葉だ。

この地が輩出した幕末の志士たちが、新しい日本の夜明けを夢見て駆け抜けた時から150年。地域に流れる進取の気性は受け継がれ、梶原の挑戦は続く。

(取材・文責 全国町村会広報部)



## 町 村 N a v i

## 岩手県雫石町

## 中学生の登下校にホテル送迎バスを活用

町は今年度から、中学生の登下校に新たに町内にある宿泊施設の送迎バスを活用する「地域資源活用バスモデル運行」を始めた。1年間継続して実績を検証する。

町の面積は約600平方キロメートルあるが、中学校が統合で1つとなった。このため全小中学生を対象にスクールバスを7路線8系統で運行しているが、全域をカバーするのが困難な面もある。このため、「過疎地有償運送」が制度化されたことを受け、遠隔地に住む中学生を対象にホテルや旅館等が所有する送迎バスをスクールバスとして活用することにした。具体的にはNPO法人「いきいきくらしネット」に登録した5宿泊施設のバスドライバーが運行している。このため、町では今年度予算に約380万円を計上した。

町は農業のほか観光が基幹産業で、道の駅「雫石あねっこ」入浴者が100万人を達成している。

宮城県松島町  
「松島ファンクラブ」の  
会員募集

町は、「松島ファンクラブ」の会

員募集を始めた。8月末まで受け付ける。

松島は日本三景の一つと称される風光明媚な観光地。ファンクラブには松島が好きな人ならだれでも入会できる。年会費は1000円。

会員になると、▽観瀾亭・福浦橋への無料入場▽最新情報の話題や特典が満載のファンクラブ通信の送付(年3回)▽旬な物産品を紹介する物産パンフレットの送付(年2回)▽ファンクラブの集いへの参加—などの特典がある。5月10日から募集を開始し、同19日時点で既に13名の申込みがあったという。

## 秋田県羽後町

## 「茅葺民家」の保存で屋根補修費用を補助

町は今年度から、茅葺屋根の補修費用の一部を補助する事業を始めた。町内には約80軒の茅葺民家が残っており、県内でも最多の現存率をほこる。2010年度予算に200万円を計上した。

補助額は補修費用の3分の1で上限は30万円。補助期間は2015年度までで、事業の継続・廃止は2016年度予算編成までに決定するほか、補助金合計額が200万円を超える場合には補正予算で増額するとした。

町はこのほか、茅葺民家や文化の保存を目的に茅葺職人の育成を昨年10月から開始。現役の職人(頭領)の下で約3年間修行して技術を習得するもので、現在、2人が一人前の茅葺職人を目指して修行している。

## 佐賀県みやき町

行政への暴力団排除で  
鳥栖署と合意書

町はこのほど、町の行政全般から暴力団を排除することなどを内容とする「行政事務からの暴力団排除合意書」を佐賀県警鳥栖署と締結した。合意書は、町が行う工事の請負契約や物件買入れ、指定管理者の指定などの契約で相手方が暴力団等の疑いがあるとき、警察に照会するなど連携して排除措置を講じる。排除措置後に妨害が予想される場合も、警察が支援・協力することも盛り込んでいる。

2008年11月に、指定暴力団が町に進出するとの情報が寄せられ、佐賀県や県警察本部、住民と暴力団放火決起集会を開催するなど迅速に対応し、約半年の短期間で問題となった土地建物を買い取ることができた。また、佐賀県が昨年6月、行政全般から暴力団等を排除することなどを盛り込んだ包括的な合意書を県警察本部と全国で初めて締結。こ

れらの経緯を踏まえ、今回の締結となった。

## 熊本県大津町

ホームページが総務大臣賞  
等を受賞

町は、町のホームページが、(社)日本広報協会主催の平成22年全国広報コンクールのウェブサイト町村部門で「総務大臣賞」を受賞したと発表した。また、地域のニュース、人物などを積極的に取り上げ、住民の視線を生かした編集が特に優れている作品に贈られる「読売新聞社賞」にも選ばれた。

全国広報コンクールは、地方自治体の広報活動の向上に寄与することを目的に、各種広報作品についてコンクールを行い、優秀作品を表彰するもの。1964年から実施されている。

町のホームページは、「子育てカレンダー」や「今日の給食」「からいも料理コンテストのレシピ」などユニークなページが数多くあり、バーナー広告事業では、ホームページを持っていない各種団体等を紹介できる新たなサービスを行っていることなどが高い評価を受けたという。



## 情 報

## 健康に生き抜く方法

## あなたの皮膚は「菌」が守っている

フリーライター 館野 公二

## 清潔も度を過ぎては逆効果

私たちの身の回りには抗菌グッズが  
いっぱいあります。靴下、歯ブラシ、ボ  
ールペン、キッチン用品 etc.。最近で  
は、エアコンや加湿器に除菌機能を搭  
載したものもヒットしています。これ  
らの抗菌グッズの中には、定義の曖昧  
なものや、効果に疑問のあるものも少  
なくありません。

銀や銅を使った繊維を使用したとい  
っても、抗菌靴下の中が無菌状態に  
なるわけではありません。キッチンで  
抗菌まな板を使ったからといって食中  
毒がなくなるわけではないのです。抗  
菌製品への過剰な期待は禁物。むしろ  
アレルギーの誘発や、耐菌性の増加な  
ど、マイナスの面も気になります。

日本人は清潔好きの国民といわれま  
す。洗濯や掃除をまめにするこや、  
よくお風呂に入るのはいいことでは  
しょう。でもすべての菌を殺してしまっ  
たら、人間にとって困ったことになりま  
す。なぜかという人間は菌と共生し  
ているからです。

## 菌と人は共生関係

体重60キログラムの人の体は、60兆  
個の細胞からできています。では菌は

どれくらいいるのでしょうか。皮膚や粘  
膜にも菌はいますが、その多くは大腸  
を中心とした消化管に住み着いていま  
す。体内には細胞数より多く、1000  
兆個、重さにして1〜2キログラムに  
もなる菌が存在するといわれています。

体内だけではなく、皮膚にも常に菌  
がいます。皮膚常在菌と呼ばれる表皮  
ブドウ球菌は、肌のトラブルを防ぎ、  
有害な菌が繁殖するのを防いでいるの  
です。

手や体の洗すぎは、せっかく私た  
ちの皮膚を健康に保ってくれている皮  
脂分や、皮膚常在菌を減らすことにな  
ってしまいます。最近では、常在菌  
を殺すことにつながるので、傷は洗浄  
するだけで消毒はしない方がよいとい  
う治療法も注目されています。

菌は不潔なだけの存在ではありません。  
菌。私たちは菌のような微生物とも、  
お互いに助け合って共に生きているの  
です。いたずらに菌を殺してしまえば、  
健康にマイナスの影響も出てくること  
を覚えておいて下さい。そしてみずみ  
ずしくバランスの取れた肌は、皮膚の  
常在菌のお陰であることも意識して、  
洗いすぎに注意しましょう。

## 21 世紀の火葬炉

発明協会賞受賞

科学技術庁長官賞受賞



富士建設工業(株)

本 社：新 潟 市 ☎(代表) 025 (255) 4161

静岡県 新居町斎場 やすらぎ苑

里山からの  
便り①

## 若い力が地域を変える！

NPO法人  
有限会社  
いぬね！おおあき  
INE OASA  
大 朝 交 通

皆 田 潔



### まずは自己紹介から

私は平成19年夏から島根県中山間地域研究センターの客員研究員となり、島根県浜田市弥栄町（旧弥栄村）に移り住み、高齢化が急速に進行し集落運営の担い手不足が深刻化する小規模高齢化集落の再生に取り組む事業に携わりました。ここでは里山プランナー、地域マネージャーとよばれる役割を担い、人々をつなぎ、住民自らが団結して弥栄を盛り上げる下地づくりを進めてきました。今年の4月からは弥栄の常駐を離れ、学生時代、研究フィールドであった出身地近くの広島県北広島町の旅行業・旅客運輸業の民間会社に移り、広島・島根の中山間地域に都市部から農村に人々を惹き寄せ、農村を知ってもらい、好きになってもらう、そしてUターンに繋がる企画を興したり、地域農業の活性化のための仕組みづくりなどを行っています。日々旅行業や旅客運輸業とはあまり関係のな

い仕事ばかりしていますが、結局のところ、人口減少に歯止めのかからない中山間地域の人口を増やす手立てを考え実行し、次世代を育てて持続的な地域社会を築かなければ、中山間地域は成り立たないという経営者の危機感からこうした業務を任されています。現在は弥栄と北広島町の二つの地域を中心に日々走り回り、農村で暮らす人々が子や孫と安心して暮らし、先祖代々続くこの地に住み続けていてよかったと思うような仕組みづくりを行っています。

### 弥栄町のこと

私が3年半活動していた弥栄町は人口1,559人（平成22年4月現在）、信号が一つもない町です。個人が営む規模の商工業が数件で基幹産業は農業のみの小さな町です。かつてはたたら製鉄や薪炭産業で栄え約6,000人もの人々を養ってきた自然と密接な関係を築いてきた村でした。しかし化石

燃料への転換、高度経済成長を境に人口は急速に減少し、現在では高齢化率が43%を超える典型的な過疎地域になってしまいました。記録によると明治初期から昭和30年前半には人口5,000人台を維持してきた地域がこのわずか60年余りの間に1/3に減少する事態に陥っています。

弥栄町ではひたむきに農地や家、そして自然と上手に向かい合い、暮らしの知恵や技を持つ多くの人々に出会いました。その人々の生活は、食、エネルギー、生活全般に至るまで極めて自給的な暮らしを当たり前のようになされていました。例えば、家の周りで採れる山菜を加工し保存して1年間食べられるようにしたり、畑では一人で年間40種類もの野菜を家族が食べるだけ作っていたり、裏山の木を切り毎日風



弥栄の玄関口、野坂集落。峠のトンネルを抜けると春は桜、夏は稲の緑、秋は黄金色、冬は白銀の田園風景が広がる。

呂の湯を湧かしたり、山の草を刈りそれを堆肥にし、とてもおいしいコメを作ったりと、この先、食糧不足、エネルギー危機が訪れてもこの町の人たちはずっと生きていけるすごい町だと感じました。それでも、そういう生きるためのすごい技を持った人々は高齢者ばかりで、次世代への継承はほとんどなされていません。そしてもう一つ、農村のいいところは人々が助け合って生きていくという習慣です。何かをお裾分けしたり、作業を手伝ったりすると、必ず何かが返ってきます。それは貨幣価値や数値で表しきれない「気持ち」という概念で、それこそが農村を維持してきた重要な要素でした。しかし、「生きるための技や知恵」「相互扶助の精神」という農村に不可欠な要素の消滅が目前に迫っていることに大きな危機感を感じました。いくら世の中が近代化しても、生活の利便性が向上してもこれらなくして農村は成り立たないのです。

それを維持するために何が必要でしょうか？私は教育だと思っています。次世代を担う子ども達が生まれた地に住み、親や地域からここで暮らす術を学び、役立たせるための教育が今必要なのです。私も広島市近郊の農村地域の出身ですが親から自分の生まれ、自分の周りのことを聞いたことがなく、自分の土地の場所、境界などをほとんど知りません。親も70歳になろう



## 情 報



毎年恒例の「元旦はしろう会」を盛り上げる岡田さん（中央）。熱い人柄が寒さを感じさせません。

としており、「元氣なうちに聞いておかなければ」とこうした地域と関わる中で強く感じるようになりました。農村の場合、先祖代々そこで生きてきた手段が必ず家の周りにあります。これはそこで生まれ育った人にしかわからないことなのです。今農村で暮らす若者がこうした状況を認識し、自分の子どもに対しての教育に強く関心を持つてもらえるようになることが持続的な地域を築くために欠かせない要素だと思います。

## ▼ 弥栄の若者を牽引する若者

弥栄にもこうした強い想いを持って行動する若者がいます。浜田市弥栄支所自治振興課の岡田浄さん（35）です。岡田さんは生まれも育ちも弥栄。現在、

弥栄郷づくり事務所で島根県中山間地域研究センターによる「中山間地域に人々が集う脱温暖化の郷づくり事業」に従事し、地域住民の持つ将来への不安やそれにより漂う閉塞感に対して住民と行政が一緒になって考え行動するきっかけづくりに力を注いでいます。岡田さんは自治体合併により職員が減少し、職員が地域に出て住民と話す機会がほとんど失われた現状を非常に危惧しています。休日には個人的に住民宅を巡回し住民の様子を伺っている姿がそこにあります。「日常の業務中にはできないから」と。行政と住民との隔たりを感じた一瞬でした。でも、住民が細かい生活を強いられる大雪の日は業務そっちのけで独居高齢者宅に私たちと除雪に向かいます。行政批判が多く聞かれる中で、住民にとって岡田さんは別格なのかもしれません。感謝され、相談に乗り住民の心の支えになっているのです。

こうした岡田さんの精力的な行動についていく行政職員もたくさんいます。実際は岡田さんが周りを強引に引きずり込んだ感もあるのですが、その弥栄支所中心の若手職員の集まり「弥栄はなえる会」は地域活動やイベントで弥栄の至る所に参加しています。昨年は溝口島根県知事に弥栄の実情について直接手紙を書き、知事自ら訪問されたこともありました。精力的な行動と求心力が今の弥栄の「元氣」を支え

ているのかもしれませんが。

そんな岡田さんが現在力を入れているのが「おいしい弥栄市」と「やさか学校」です。前者は、弥栄の産品を浜田市の市街地で販売し、少しでも弥栄の人たちの所得を増やし、弥栄をPRし、弥栄に足を運んでもらうきっかけ作りとして行っています。餅つきの実演、椎茸のコマ打ち体験を企画し弥栄のいいところを街の人々に体験してもらい、おいしいものを味わえる場を作りました。初回の弥栄市ではお客さんが多すぎてクレームも殺到するほどでしたが、弥栄を楽しみにしている消費者がたくさんいることがなにより今後の励みになりました。そして、もう一つの「やさか学校」は、前述のように人間関係が希薄化し将来の地域のことをみんなで考えていく場がなくなっていることに気がつき、みんなが将来の弥栄を考える機会を作りました。住民もそういう場を求めていたのか議論は白熱し、住民から過去の反省が聞かれたり将来への不安が吐露されていきます。こうした、意見を積み重ねていけば、この弥栄に何が必要でどう行動すればよいのかが必ず見えてくるような気がします。今まで将来への不安から閉塞感すら感じられた弥栄でしたが、このやさか学校から復活ののろしをあげる集いの場になろうとしています。

そんな岡田さんは小学生と保育所に通う二娘の父。いつも弥栄から出ない

ように育てていると豪語しています。そういうことを自信満々に話すような人はなかなか見かけないものですが、弥栄が大好きな岡田さんにとってそれはある意味、弥栄を何とかしなければならぬという強い責任感のようにも感じます。それは娘達への教育の他にも、陸上教室の指導者として弥栄から強い選手を育てています。子ども達を引き連れ叱咤激励する声が今日も弥栄に響き渡っています。岡田さんの口癖は「苦しいは楽しい！」その意味は子ども達にはさっぱり理解されていないようですが、弥栄の子ども達はみんな弥栄に残れ！そう言っているようにも聞こえます。

地域の子どもを大切にし、弥栄を教え、育てる姿勢がとても頼もしく感じます。あまり褒めると気持ち悪いと言われそうなのでこの辺にしておきますが、地域社会を持続的に営み続けるにはこういう人が欠かせないと思います。農村では年配者の意見が強く若者の意見が通りにくい背景も残っていますが、それをいい意味で壊し若者の立場から地域を創っていく良いお手本がここにあるように思えました。

さて、次回夏の便りでは豊富な「暮らしの技と知恵」を持つお年寄りを束ねて、弥栄を元気にしようといういろいろな企んでいる東京から弥栄に「ターンして10年の」とある女性にスポットを当てたいと思います。お楽しみに。

随 想

## 町長への挑戦

鹿児島県長島町長 川 添 健



## 1 誕生への徒然

私は、9人兄妹の末弟として生まれた。育った家の庭先は海であったが、家業は農業一筋の零細経営のため父母の子育ては大変であった。父は焼酎が好きで、小さな集落の世話をしながら町の議員を4期務めた。そのため母一人の労働が多く、苦労は並大抵でなかったらと思う。数少ない一家団欒の中で父は「先生は学校で教育をする人。医者は病人を治す人。船長は安全に航海をする人。色々な仕事の中で、政治が全てを統括して方向を導いて行く大事な仕事だ」と論じていた。結果、私は町長を志したのかもしれない。

私の集落は町の中心部（役場）から4km離れていたため、雨の日も風の日も、暑い夏の日も歩いて通学しなければならなかった。考えてみると通学した9年間で健康の礎になり、首長の必要条件であると舒緩し

ている。

企画財政の係長7年、同課長8年、総務課長1年など役場職員として36年間勤務した後、収入役を1期4年務めたので、公務は十分満喫できたと思っていたが、節目で上司と意見が相違し、自分が町長ならばと思うようになっていた。

## 2 合併した町づくりの方向

希望に満ちた町づくりを展開していくため「夢と活力があり、福祉が充実した町づくり」を政策目標として掲げている。

「夢」は、①国家的プロジェクト事業の三原架橋実現②それを結ぶ地域高規格道路の整備③町民、島民の悲願である獅子島架橋実現④自然を活かした交流人口の拡大など

「活力」は、①農業漁業を中心とした産業と観光が調和した町②都市と地方、旧町間の格差是正③今の経済状況に対する雇用対策④日常生活の

利便性を考えた公共事業の導入など「福祉」は、①福祉事務所を中心とした、行政と住民の顔が見える1万2千人一人ひとりを大切にすきめ細やかな福祉の充実した町づくりなど

## 3 統一の目玉

隣接していたとはいえ旧2町間には政策に相当の違いがあった。住民の意識も異なり一本化には困難を来たした。

「攻撃は統帥綱領で人心を一点に集中し、守備は離散させる」と言われるように、住民が集中できる政策が欲しいと考える中で、長島一周40kmの国道、県道沿いに長島の自然石を利用した花壇の回廊づくりを発想した。面的な花公園や花畑は多いがラインとしての整備はあまりない。また、小さな自然石は無人造にあり、

町外に持ち出されて庭石等に利用されているだけであった。政策推進には多分に神がかり的要素がある。フラーロード事業も単独でできる財源はなかった。心配している最中に不況に伴う国の雇用対策や特色ある町づくりの交付金があった。お陰で計画が順調に進んでいる。

町づくりには、何かひとつ町民が集中できる政策が必要であり、結果

として住民が癒され、自慢でき、町外の人々にも感動を与えられたと実感している。

## 4 強烈な執行体制

町づくりは、強烈な執行者の情熱が必要であり、政治にどんな理想を掲げて情熱と行動力が無ければ政策の実現にはほど遠い。その原動力となる役場職員が先頭でなければならぬ。私は先ず職員に①笑顔とスピードで対応します。②出来ない理由でなく、出来る方法を考えます。③全力で知恵を出し、知恵がなければ汗を出します。④町長のつもりで夢を描きます。の4点を町民と約束してもらった。その成果は1期4年で確実に現れ、行財政改革はもとより合併時11億円余りであった基金が、21年度末には25億円余り、14億円の積み増しができた。

最後に、政策目標である『夢と活力があり、福祉が充実した町づくり』のために、「貧しくとも、一人ひとりが大切にされ、生きる喜びを実感できる家庭」「住民が参加し、実践し、自慢と誇りを持てる地域」「住民と行政がキャッチボールできる町」を実現したい。「若者には夢と活力を」「社会的弱者には、充実した福祉を」が町長としての将来像である。